

外来看護に関する研究の動向と課題

佐藤 正美¹⁾ 金田一理香²⁾ 末永 由理¹⁾ 剣持 梓³⁾

要 旨

外来看護に関する1992年以降の研究論文87件を対象に、研究対象や場の特徴とその研究におけるテーマ、研究の探求レベルを分析し、外来看護に関する研究動向と今後の課題を検討した。その結果、糖尿病患者への看護援助の検討が最も多かったものの、在宅療養指導料算定の有無に関わらず様々な対象への研究がみられ、新たな看護の取り組みの効果や、社会との情報交換・連携の効果などが示されていた。今後の課題として、看護師の看護援助を必要としている対象をスクリーニングし、関わることの有効性を研究すること、昨今の外来看護活動状況を把握するための大規模調査を実施すること、対象のQOL向上につながる質の高い外来看護実践により、費用対効果の面から有効であることを主張すること、評価された看護援助方法をさらに実践し、対象を増やし研究としてまとめ報告することが示唆された。

I はじめに

近年外来受診者は増加傾向にあり¹⁾、それには生活習慣病の増加および平均在院日数の低下²⁾もその理由と考えられる。医療法と診療報酬の改定により、治療の場は入院から外来、在宅へと急速に拡大されている。1992年に「在宅療養指導料」が新設され、初めて外来の看護に特別な点数が設定された。その後、1998年の診療報酬改定から、在院日数の短縮化が急速に進んだ。2002年度の診療報酬改定では、「点滴注射外来化学療法加算」も新設され、ますます外来での治療内容および治療範囲が拡大している。さらに、外科的療法を受け術後短期間で退院するために、外来での処置を必要としている人も数多い。したがって、外来での看護の対象の範囲が拡大されているだけでなく、そこで要求される判断や対処、援助技術、患者教育を含めた看護実践の質も問われている状況にあり、さまざまな場面で看護師の役割は増えている³⁾。

しかし、実際の外来はどのような状況であろうか。外来における看護師の配置基準は依然として変わらず患者30対看護師1であり、何名の看護師を外来に配置するかは、各病院の裁量といえる。では、実際

に外来における看護の質は高まっているであろうか。質の高い看護実践を提供できる状況にあるのだろうか。質の高い看護実践を提供するために、効果的な看護援助方法が見出されるべく研究が重ねられているのだろうか。これらの疑問および外来看護に焦点を当てた文献レビューは見当たらない。

したがって本研究では、在宅療養指導料が算定された1992年から最近までの外来看護に関する研究論文について、研究対象や場の特徴とその研究におけるテーマを①システム、②看護の対象、③看護者、④看護者と対象者の関わりの4つの視点から分類し、さらに研究の探求レベルから、外来看護に関する研究動向と今後の課題を検討することを目的とした。

II 研究方法

1. 研究期間

平成14年6月から10月

2. 分析対象とした文献の選択

医学中央雑誌Web (Ver.2) をデータベースとし、在宅療養指導料が新設された1992年以降で「外来看護」をキーワードとして原著に分類された文献を検索し(平成14年8月)、161件がヒットした。外来看護が研究テーマとなっていない5件と、総説に分類されると判断した42件、施設発刊の研究収録集に掲

1) 川崎市立看護短期大学

2) 川崎市立井田病院看護部

3) 新潟大学医学部保健学科看護学専攻学部生

載されていた27件を除いた87件を本研究における分析の対象とした。施設発刊の研究収録集は、本データベースに含まれてはいたものの、流布先はある程度限定されており、研究の積み重ねという観点から研究結果活用には寄与しにくいこと、限られた一部の施設における収録集であることより、本研究の分析対象から除外した。

3. 使用した概念枠組み

本研究において使用した概念枠組みは次の二つである。まずは<研究のテーマ>に焦点を当てた枠組みであり、図1に示した。

病棟と異なり外来において質の高い看護実践を提供するには、まずは環境いわゆる①システムが必要であると考えた。システムには、看護実践の場の構築と、実践を継続および評価するためのツールとしての記録に関する研究を含めた。病棟とは異なる人員配置基準のため、看護実践を提供できるシステム自体がないことには、継続した質の高い看護援助を実施することはできないと考えた。

次に②看護の対象である。質の高い看護実践を提供するには、その看護の対象である患者の状況理解なくして看護方法の検討はできない。この分類に含まれるのは、ケアを受ける患者の実態であり、援助方法の示唆を与えてくれる研究テーマといえる。

次は③看護者である。看護を提供する看護者自身の状況について知ることは、看護実践を提供する道具を知ることである。道具の性質や傾向がわかる、すなわち看護者の状況を理解することは、看護実践を担う外来看護師のサポート体制や継続教育内容の視点からの研究テーマといえる。

最後は④対象者と看護者の関わりであり、実際の看護援助に焦点を当てた研究である。このテーマの研究が蓄積されることによって、どのように援助することが患者にとって、より良い健康状態へ向かうことにつながるのか、その援助方法を吟味でき、質の高い看護実践を検討するのに不可欠な、また直接臨床実践に還元できる研究テーマといえる。

もう一つの分析枠組みは、<研究の探求レベル>である。看護学における研究の目標は、看護実践の質の向上であると考えられる。したがって、外来看護実践の質の向上を図るためには、数間ら⁴⁾が述べている研究の探求のレベルと研究課題のタイプの発展過程の視点から捉え研究の積み重ねを分析することが、外来看護における研究の発展レベルおよび今後の課題を検討する分析方法になると考えた。しかし本研究では、外来看護全般にわたる研究を対象としたことから、さまざまな対象および看護実践が分析対象となり、この4つの探求レベルと研究課題のタイプに分けることが困難でありかつ、厳密に4つに分けることの意味を見出せなかったため、『探索型研究』と『検証型研究』の2つに分類することとした。『探索型研究』の研究成果は、理論あるいは仮説生成であり、『検証型研究』の研究成果は、理論の検証および状況の産生である⁵⁾。したがって、この2つの分類でも十分に研究の発展過程を分析できると考えた。本研究においては、この二つを研究の探求レベルとする。

さらに研究対象となった場や施設が一施設ではなく多くの施設が対象となった研究は、特定の施設に限定されることのない、より一般化できる結論を得られる研究と考える。また事例研究は、研究結果が

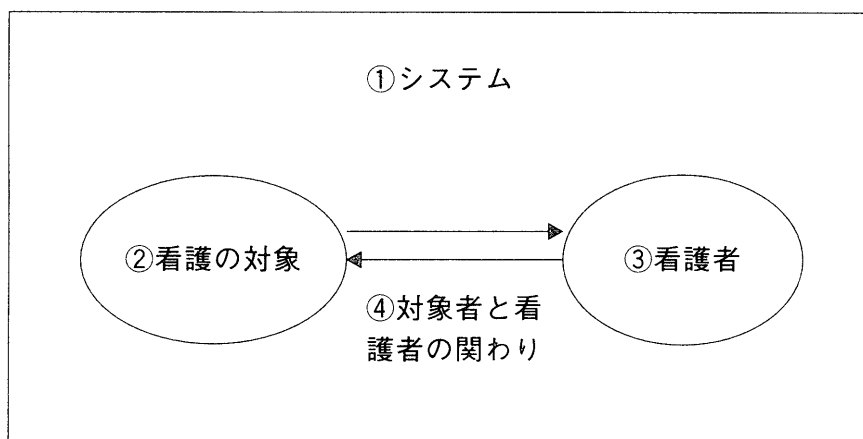


図1 研究テーマ分類に関する概念枠組み

対象の持つ個人的要因に大きく影響され、研究結果の一般化は難しいものの、看護実践に多くの示唆を与える研究方法であるため分析の対象に含めた。

4. 分析方法

研究対象文献87文献について以下の分析を行った。

まず論文発表年次ごとの論文数をカウントした。次に、4つの研究テーマ（①システム、②看護の対象、③看護者、④看護者と対象者の関わり）に分類し、さらに研究テーマごとに、研究の探求レベル『探索型研究』と『検証型研究』に分類するとともに結論を読み取り、研究の動向と今後の課題を考察した。

Ⅲ 結果

1. 外来看護研究に関する研究論文数の動向（図2）

1992年より1998年までは一桁の論文数であったが、1999年より二桁となった。研究テーマは、各年次でばらつきがあるものの、②看護の対象と④看護者と対象者の関わりが1999年以降比較的增加した。

2. 研究テーマと研究の探求レベルによる分類

（図3）（表）

1) システムに関する研究について

システムに分類された研究は20件あり、うち3件

は事例研究であった。

看護記録に関する研究は、長期通院患者の中間サマリー⁶⁾、救急室看護記録用紙⁷⁾、薬物療法を受ける患者への記録用紙⁸⁾、立体像モデルの採用⁹⁾、POS導入¹⁰⁾の5件あり、いずれも記録用紙の作成や修正とその評価に関する検証型研究であった。情報の伝達、看護援助の継続性、対象の個別性に応じた援助実践が検証されていた。

新たな援助体制や方法の導入に関する研究は5件で、更年期外来同窓会の導入¹¹⁾、精神科外来予約制導入¹²⁾、在宅酸素療法患者への支援¹³⁾、外来コーディネーター導入¹⁴⁾、外来看護実施手順の有効性¹⁵⁾のいずれも検証型研究であった。それぞれの取り組みはいずれも効果があり、その中でも外来コーディネーターの導入により、膣式子宮全摘患者の平均在院日数が1.2日短縮され、患者の手術や入院に対する不安や疑問が軽減する¹⁴⁾ことが示された。

現状の業務内容や業務量を分析した探索型研究は8件あり、ストーマ外来¹⁶⁾、小児科¹⁷⁾¹⁸⁾、対象の障害の有無による採血業務におけるケア量の違いの分析¹⁹⁾、外来業務一般²⁰⁾²¹⁾、救急外来の看護スタッフの配置²²⁾、診療科ごとの看護要員配置²³⁾であった。小児科外来看護業務の分析¹⁷⁾は、125施設を研究対象とし分析しており、他に1747施設を対象とした看護業務分析²¹⁾もあった。大規模な外来看護業務分析²¹⁾は1992年に報告されたもので、実施割合が高

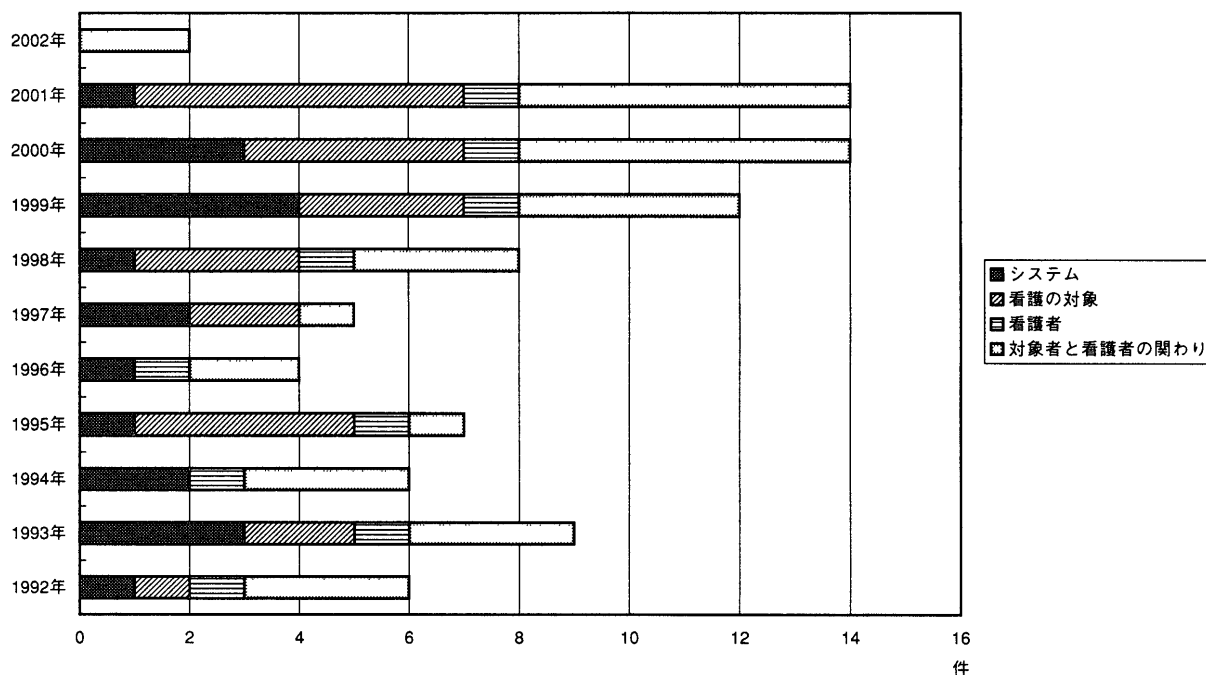


図2 外来看護研究に関する研究論文数の動向

いのは「診察の準備と介助」で、約90%の看護職が診察や器具の準備と後片付け、診察の介助を行っていたが、指導的援助にかけられる時間は少なかったものの多くの看護職が実施していた。しかし、診療業務に支障のない範囲でしかできない状況であった。

その他、465施設を対象とした在宅療養指導料活用の実態調査²⁴⁾、外来看護業務に対する医師への意識調査²⁵⁾があり、いずれも探索型研究に分類された。在宅療養指導料の請求実績ははまだ十分とはいえず、今後の活用拡充は看護職自身の姿勢にかかっており、各施設における指導の体制・システムの整備が急務である²⁴⁾。医師が外来看護師の役割として期待していることは、診療の場面において患者の不安や緊張を軽減させ、病気や治療法などの理解を促進させることであり、さらに今後は個別的な相談・指導に重点をおき、患者の理解や感情の支援に力を注ぐこと²⁵⁾であった。

2) 看護の対象に関する研究について

看護の対象に分類された研究は24件ありすべて探索型研究で、事例研究は4件であった。

外来患者のニーズを調査した研究は6件で対象は、救急外来²⁶⁾、外来全体^{27) 28)}、小児科外来²⁹⁾、高齢者³⁰⁾、理学診療科³¹⁾であった。それぞれ特定の施設の場における患者を対象としたもので、患者のニーズが明らかにされ実践課題を見出していた。その他には、成人期と老年期患者の受診相談内容³²⁾、精神科外来における受診相談者の背景³³⁾、介護する家族に焦点を当てたものが2件あり、在宅神経難病患者の介護家族³⁵⁾と痴呆患者介護者³⁵⁾に着目していた。また、実際に起きた野宿生活者の伝染病発生から外来看護の機能と役割³⁶⁾を考察している研究もあった。

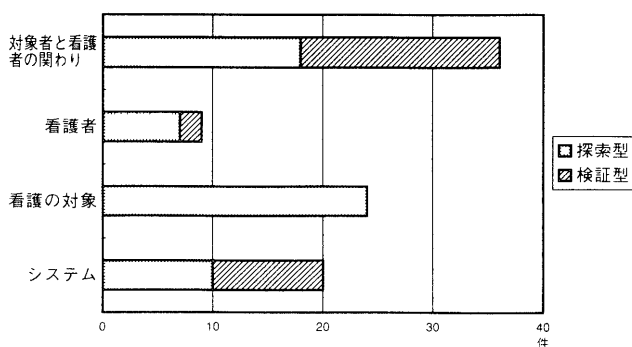


図3 研究テーマと探求レベル

対象の健康障害別にみるとオストメイトは3件で、ストーマ外来で援助した患者の事例研究^{37) 38)}、ストーマ外来がなく退院後長期経過しスキントラブルを起こした患者の事例研究³⁹⁾であった。糖尿病患者は3件あり、糖尿病患者の眼に関する意識を調査したもの⁴⁰⁾、小児糖尿病患者の肥満度と関連要因を検討したもの⁴¹⁾、食生活の実態と背景を調査したもの⁴²⁾があった。心疾患患者を対象とした研究は、療養行動決定の構造を明らかにしたもの⁴³⁾、PTCAを受けた患者のその後の生活状況を調査した研究⁴⁴⁾の2件であった。その他には眼科患者を対象としたQOLの検討⁴⁵⁾、体外受精治療を受けている患者を対象としたもの⁴⁶⁾、生体部分肝移植後の両親に焦点を当てたもの⁴⁷⁾、在宅でホルモン注射を実施している下垂体性小人症患児を対象としたもの⁴⁸⁾、インターフェロン療法を受けている人を対象とした事例研究⁴⁹⁾があった。いずれも特定の一施設に限定されていたが、様々な状況にある患者の実態が明らかにされていた。

3) 看護者に関する研究について

看護者に分類されたのは9件であり、そのうち2件は検証型研究であった。

探索型研究に分類されたものは看護師のストレスを調査した研究が2件で、救急外来における看護師に関するもの⁵⁰⁾と、外来看護師一般に関するもの⁵¹⁾

表 研究テーマ・内容による分類

研究テーマ・内容	文献数
① システムに関する研究	20
看護記録	5
新たな援助体制や方法の導入	5
業務内容・業務量の分析*	8
その他 (在宅療養指導料活用の実態、医師への意識調査)	2
② 看護の対象に関する研究	24
外来患者のニーズ調査	6
受診相談に関する調査	2
介護家族に関する研究	2
オストメイト	3
糖尿病患者	3
心疾患患者	2
その他	6
③ 看護者に関する研究	9
看護師のストレス	2
悩み・困難	2
その他*	5
④ 対象者と看護者の関わりに関する研究	35
糖尿病患者への看護	10
精神科疾患患者への看護	4
小児やその家族への看護	5
ターミナル患者への看護	3
妊産婦への看護	4
看護行為・相談活動	2
その他	7
計	87

*両方に分類された1文献を含む

があり、また96に及ぶ施設の外来看護師の悩みを尋ねた調査⁵²⁾、がん患者に携わる5施設の看護師の困難⁵³⁾があった。救急外来に勤務するほとんどの看護師がストレスを感じており、当直中十分な仮眠が確保できないとストレスが増大していた⁵⁰⁾。また対人関係に関して最もストレスを感じていた⁵¹⁾。その他の研究は、小児科外来の看護の役割に対する認識¹⁷⁾、外来看護師の発する言葉⁵⁴⁾、患者会発足に関わる外来看護師の役割⁵⁵⁾であった。

検証型研究は、外来看護評価基準の作成とその基準による自己評価に関するもの⁵⁶⁾、業務改善前後の意識と看護量を比較した研究⁵⁷⁾で、業務改善により直接看護量が増加し看護師の満足度が上昇していた。

4) 看護者と対象者の関わりに関する研究について

分類されたのは35件であった。探索型研究と検証型研究とも18件であった。糖尿病患者を対象としたものは10件と最も多く、探索型研究では、428施設を対象として看護の実態⁵⁸⁾と看護実践への影響要因を分析⁵⁹⁾した一連の研究が2件と、315施設を対象として看護活動の実態⁶⁰⁾を調査したもの、また正木による糖尿病専門外来看護実践を通しての慢性疾患患者の看護援助の構造化の試みに関する一連の研究^{61)–63)}があった。検証型研究には、食事指導に栄養バランス表図示を用いたもの⁶⁴⁾、インシュリン療法導入時の個別指導に関するもの⁶⁵⁾、電子メールを用いた看護相談に関するもの⁶⁶⁾、通院中断患者への電話相談を試みたもの⁶⁷⁾の4件があった。いずれも実施の効果が報告されていた。

不登校児を含めた精神科疾患を対象としたものは4件でそのうち3件は事例研究であった。探索型研究は2件で、外来看護師一同が互いに情報を交換し、患者をありのまま受け止めた事例⁶⁸⁾と、看護面接の実際⁶⁹⁾であった。検証型研究は、注意サイン・服薬自己評価用紙の活用⁷⁰⁾と不登校児が自立するまでの心理過程を分析したもの⁷¹⁾であった。いずれもその効果が報告されていた。

小児やその家族を対象とした研究は5件あり、小児がんの告知に関する探索型研究⁷²⁾と、他4件の検証型研究であった。病名告知前の小児がん患者は、病名を知りたいという気持ちを持ち準備ができ告知を受けると、軽度なショックを受けるものの告知内容を理解し受け入れ、告知後は健康に対する自覚が向上し、親や社会に感謝の気持ちを抱くなど成長し

ていた⁷²⁾。その他は、実際の援助とその評価をまとめた検証型研究であり、家族システム理論を用いた⁷³⁾り、看護過程を共有した⁷⁴⁾り、長期間にわたり在宅中心静脈栄養を実施している患児⁷⁵⁾を対象とした事例研究と、養護教諭と連携して慢性疾患患児の支援をはかった研究⁷⁶⁾があった。いずれも実施した援助の効果が示されていた。家族をシステムと捉え、家族として解決できる力量を形成できるよう継続した援助と指導を実施することが重要であり⁷³⁾、また看護過程を共有することにより家族の主体性が養われ家族のセルフケア能力が高まった⁷⁴⁾ことが示された。

ターミナル患者を対象とした研究は3件あり、いずれも事例研究であった。患者のみならず家族とも関わりをもった実践⁷⁷⁾の記述と、癌性疼痛に不安を持つ患者への関わり⁷⁸⁾が探索型研究で、KOMIチャートを用いた実践の評価⁷⁹⁾が検証型研究であった。KOMIチャートを使用したことにより、患者の生活全体を見つめることが可能となった⁷⁹⁾。

妊産婦への支援の研究は4件で、夫との性的関係に失調をきたした妊婦への支援に関する事例研究⁸⁰⁾は探索型研究であり、性の問題に対する助産師の役割が述べられていた。その他、脊損妊婦へ妊娠中から関わった事例⁸¹⁾、母乳外来の評価⁸²⁾、1ヶ月検診での育児相談⁸³⁾は検証型研究であった。母乳外来には、初産婦で乳房トラブルによって1ヶ月以内に受診する人が多く、ほとんどが症状改善されていた⁸²⁾。また育児相談では個別指導の必要性が確認でき、援助方法の指針が得られた⁸³⁾。

特定の状況を持つ個人を対象とした研究以外にも、リハビリテーション専門病院における相談活動の分析⁸⁴⁾と大学病院における看護行為の分析⁸⁵⁾があり、いずれも特定の施設で探索型研究に分類された。また相談活動の分析⁸⁴⁾からは、相談活動におけるニーズと看護師の能力が考察され、看護行為の分析⁸⁵⁾からは、今後の課題が考察された。他に探索型研究に分類されたのはオストメイトへの援助⁸⁶⁾と看護理論を用いた看護過程の展開⁸⁷⁾、生体肝移植術後長期間にわたる外来での支援⁸⁸⁾でいずれも事例研究であった。生体肝移植後は、感染予防と免疫抑制剤の服薬指導以外は精神的援助が重要⁸⁸⁾であった。

排尿への援助はいずれも検証型研究で、神経難病患者への間欠的導尿指導⁸⁹⁾と尿失禁、頻尿患者へ

の援助⁹⁰⁾の2件であった。退院する前の入院中から病棟看護師と外来看護師、保健師と相互に情報を交換し、連携をとることの必要性が考察されていた⁸⁹⁾。

その他の検証型研究はいずれも事例研究で、意図的な声掛け⁹¹⁾、身体症状を呈する生活適応障害者について⁹²⁾であった。

様々な対象への看護援助が模索され、また援助の効果が報告されていたが、外来が橋渡しとなり、治療の場と生活の場である社会との連絡・調整をはかり連携をとること、患者のみならず家族を援助の対象とすることが多く考察されていた。

IV 考察

1. 研究テーマと研究の発展過程

看護実践の場の構築と、実践を継続および評価するための記録に関するシステムの研究は、さまざまな領域で新たな取り組みの効果が示されていた。子宮全摘患者の平均在院日数の短縮と不安や疑問の軽減が得られた新たな取り組み¹⁴⁾は、今後このような看護活動が広まり、また発展することが期待される。このような外来看護師による取り組みによって、在院日数が短縮されるとともに高い満足度が得られるということは、今後の日本の医療が進むべき道には、質の高い外来看護実践が必要であること、さらにその道には看護師が一役かっていることが示されたといえる。

現状を改善に導くには、まずは現状分析が必要不可欠である。直面している問題を解決することを目的として現状を分析する研究が多く認められた。このような研究を通して、問題が明確化し問題解決が進むと考える。しかし、外来全体の看護実践の問題を解決し改善するには、特定の施設に限ることのないデータ収集が必要とされるであろう。業務分析に関しては多くの施設を対象としたいくつかの調査¹⁷⁾²¹⁾²⁴⁾がなされており、ある程度の外来全体の現状が報告されていると考える。しかし、もっとも大規模な外来看護業務分析²¹⁾は1992年に報告されたもので、もうすでに10年前のデータである。現在では外来看護の対象も、そこで行われる看護実践も大きく変化していると考えられるため、報告されたデータと現在の状況とは乖離している可能性もゆがめない。現在の外来看護実践の状況を分析するため、さらに、変化している外来看護実践活動を記述するためにも後に続く大規模な調査の実施が望まれる。

1992年に新設された在宅療養指導料は十分活用されていない現状が報告されている²⁴⁾が、それはなぜであろうか。本診療報酬項目の活用を阻んでいるものは、各施設における指導の体制・システムの不備か、それとも関わる看護師の能力が見合わず足踏みしているからなのであるだろうか。菅田ら²¹⁾も述べているように、患者30人に看護師一人という医療法の基準を満たしてさえすればよいという状況が続く限り、指導の体制・システムの整備には至らないと考える。これでは、せっかく新設され増額されている在宅療養指導料であるにもかかわらず、有効に使用せず、看護師の持ち合わせている能力を正当に評価される機会を失う、もしくは放棄している状況ともいえる。

研究されていた看護の対象はさまざまであったが、その中でも体外受精治療や生体部分肝移植など新しい治療に伴う患者および患者を取り巻く家族の反応に焦点を当てた事例研究⁴⁶⁾⁴⁷⁾もあった。これらの治療を実施している限られた施設において看護実践を営む看護職によってこのように事例を重ね、さらに事例を重ねた上で何らかの結論を出してゆく研究活動によって、効果的な看護援助方法が見出され、外来看護実践の質を確実に高めてゆけるであろう。更なる研究の継続、発展を願ってやまない。新しい治療が導入され、そうした治療を受ける患者をケアする際には、他の施設での実践を手がかりにし模索しながらケアにあたる。そのためにも、新しい治療に伴う対象の反応、看護実践やその評価に関する事例研究を世間に公表することは、先達の足跡を伝える意味深い活動と考える。また、報告された看護の対象は、在宅療養指導料算定外の患者である。対象のQOLに確実につながる看護活動だが、現在では診療報酬に反映されておらず、看護の効果が正当に評価されていないといえる。

看護者自身に関する研究は少なかったものの、看護師が対人関係で特にストレスを感じていることが示されていた。外来看護師は治療を受けに来院した患者に最も多く接するために、その接し方に関しての苦言もよく受ける。外来という一般社会と最も近く接している場では、医療サービスの消費者である患者の要求はますます厳しくなり、そのような意味からも対人関係でストレスを感じているといえる。また、そのような中でもみな看護師は、直接対象に関わり看護を提供したいと望んでいることが伺え

る。業務改善により直接看護量が増加し看護師の満足度が上昇した研究⁵⁷⁾から、そのことがいえる。したがって、本来看護援助したいという意志を持っている看護師として、その意志を発揮させるシステム、そして発揮する方法を示すことが質の高い外来看護実践につながる道といえる。

看護者と対象者の関わりに関しては、数多くの研究が報告されていた。特に糖尿病患者を対象とした研究は、大規模な看護活動に関する調査⁵⁸⁾⁶⁰⁾もいくつか重ねられ、また看護援助の構造化⁶¹⁾-⁶³⁾という理論形成につながる質の高い研究もあった。検証型研究として実践活動の効果も示されており、その中には電子メールを用いた看護相談⁶⁶⁾など時代に即した新しい取り組みも報告されている。今後さらに多くの対象に活用し評価する研究の積み重ねを期待したい。

対象者への関わりでは、患者のみならず患者を含めた家族全体を家族システムとして捉え、家族とも関わりをもった援助の効果が考察されていた。特に小児看護領域で報告されていた。病棟とは異なる、社会生活の延長線上である外来、そして時間が限定され非常に短い時間での関わりでは、特に患者のみならず周囲のサポーターである家族を含めた援助に効果があるといえる。また、入院前、入院中から退院前、退院後へと継続した看護援助のための情報交換・連携は、外来看護師だからこそ担える役割といえる。なお一層の創造的な取り組みを報告し評価する研究の積み重ねが必要といえる。

しかし、援助効果が報告されていた検証型研究は、すべて特定の一施設で行われたものであり、かつ同じ援助方法を実施してその効果を示した研究論文は見当たらなかった。外来看護実践の質の向上をはかるためには、多施設における多くの対象への実践の効果を見出す必要がある。

報告されていた看護援助実践の中には、在宅療養指導料の算定外を対象としたものも多くあった。しかし、診療報酬を伴わないにもかかわらず、いずれも対象のQOL向上に対して確実に効果が得られていた。今後、外来看護実践の活動とその効果をありのままに示すためにも、研究結果を公表し続けることは意味があると考ええる。

2. 今後の課題

医療法における基準も変わらず、依然として人員

不足で厳しい状況ではあるが、質の高い看護実践を提供できる場の構築のために、変わらずシステムの構築に励むこと。また、同時に多数の患者が来院する外来では、専門職である看護師の看護援助を必要としている対象をスクリーニングし、関わることも必要と考える。これは、歯科外来看護実施手順として看護援助対象患者のスクリーニングの有効性¹⁵⁾の報告でも示されている。また、昨今の外来看護活動状況を把握するための大規模調査の実施が望まれる。

対象のQOL向上につながる質の高い外来看護実践により、費用対効果の面から有効であることを主張するとともに、患者30人に看護師一人という医療法の基準の見直しにつなげる施策への働きかけを実践することが課題であるといえる。

また、効果があると報告された看護援助方法を、多くの場で多くの対象に実践し地道にコツコツそのデータを積み重ね、研究論文として公表し、さらにその研究を基に標準看護計画が作成されることが、外来看護実践の質の向上に寄与すると考える。

V 結語

1992年以降に発表された「外来看護」に関する文献87件を、研究テーマと探求レベル（研究課題のタイプ）、研究内容と結果を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 看護実践の場の構築に資するシステムに関する研究は20件あり、さまざまな領域で新たな取り組みの効果が示されていた。中には平均在院日数の短縮につながる取り組みも報告されていた。大規模な外来看護業務分析もあったが、10年ほど前のものであった。看護の対象に関する研究は24件あり、新たな治療に伴う患者および患者を取り巻く対象の反応に焦点を当てた研究もあった。看護者に関する研究は9件あり、看護師が対人関係で特にストレスを感じていることが示された。看護者と対象者の関わりに関する研究は35件あり、糖尿病患者に関する研究が最も多かった。電子メールを用いた看護相談など新たな看護の取り組みの効果や、家族をシステムとして捉え援助すること、病棟と外来、社会との情報交換・連携の効果などが示された。在宅療養指導料算定の対象外となる看護援助も多く報告された。

2. 今後の課題としては、看護師の看護援助を必要

としている対象をスクリーニングし、関わることの有効性を研究すること、昨今の外来看護活動状況を把握するための大規模調査を実施すること、対象のQOL向上につながる質の高い外来看護実践により、費用対効果の面から有効であることを主張すること、評価された看護援助方法をさらに実践し、対象を増やし研究としてまとめ報告することが考察された。

VI 本研究の限界

一つの限定されたデータベースから研究論文を抽出したこと、「外来看護」をキーワードとすると『透析看護』や、病棟以外のいわゆる外来で看護活動が営まれている、がん患者など特定の対象への看護活動は抽出されにくく、分析対象に含まれなかったことが本研究の限界といえる。

文 献

- 1) 厚生労働省大臣官房統計部編：平成12年度医療施設調査（静態調査 動態調査）病院報告（全国編）上巻，32-33，財団法人厚生統計協会，2002.
- 2) 前掲1)，36-38.
- 3) 中澤堅次：在院日数短縮に伴う問題，看護管理，12（8），638-641，2002.
- 4) 数間恵子，岡谷恵子，河正子：看護研究のすすめ方・よみ方・つかい方 第2版，18-21，医学書院，1997.
- 5) 酒井郁子，中久喜町子，遠藤淑美ほか：ケアリング概念に関する研究動向と今後の研究課題の検討，川崎市立看護短期大学紀要，3（1），27-40，1998.
- 6) 中野真寿美，五島典子，新田良子ほか：長期通院患者の外来看護中間サマリーの作成とその評価，日本看護学会論文集30回地域看護号，29-31，2000.
- 7) 本田文子，入山恵子，上田幸子ほか：日当直業務における情報伝達の円滑化を図るための工夫 救急室看護記録用紙の改善とその評価，共済医報，47（4），344-347，1998.
- 8) 宮下洋子，宮本洋子，伊藤恵美ほか：三重の関心を寄せた記録用紙を外来看護に用いて，ナーシング，16（4），46-50，1996.
- 9) 室住由香，瀬戸ひとみ，宮下洋子ほか：外来看護記録用紙に立体像モデルを取り入れた効果 糖尿病患者の継続的生活指導より，日本看護学会論文集25回地域看護号，70-72，1994.
- 10) 具志堅美智子：外来看護相談室におけるPOS インスリン自己注射の患者指導を通して，看護教育，35（12），1004-1006，1994.
- 11) 野地有子：更年期女性のライフスタイル変容の体験とサポートに関する研究 更年期外来同窓会を開催して，聖路加看護学会誌，5（2），36，2001.
- 12) 森藤こう恵，井手久子，佐野加代子ほか：精神科外来における予約制への利用者の評価について 外来看護サービスの改善に向けて，日本精神科看護学会誌，42（1），671-673，1999.
- 13) 片村敏恵，井上たみえ，高橋佳子ほか：在宅酸素療法患者のセルフケア能力を高めるための援助，日本看護学会論文集30回成人看護Ⅱ号，158-160，1999.
- 14) 坂本みよ子，森山陽子，山下節子ほか：外来コーディネーター導入後の評価 在院日数と患者の心理的支援の観点から，日本看護学会論文集30回看護管理号，63-65，2000.
- 15) 安本孝子，北村和美，内藤邦枝ほか：外来における看護度の導入（その3） 歯科外来看護実施手順に沿った看護の実践，日本看護学会論文集23回看護管理号，151-154，1992.
- 16) 甲斐田由美，倉本久美子，添島照子ほか：当院におけるストーマ外来の現状と課題を考える，Urological Nursing，5（8），751-757，2000.
- 17) 平林優子，及川郁子，鈴木千衣ほか：小児科外来看護の業務と看護婦の「看護の役割」に対する認識，聖路加看護大学紀要，25，41-51，1999.
- 18) 藤田せい子，清野良子，一戸啓子ほか：電話問い合わせにみる外来看護 一般病院小児科におけるその実態と新たな看護展開，日本看護学会論文集24回小児看護号，121-123，1993.
- 19) 草山佐知子，平出千賀子，三浦信子ほか：外来における採血からみた看護ケア量の分析 障害のある患者を通して，

- 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要, 25, 57-59, 1999.
- 20) 高島恵子, 八屋さとみ, 藤元実千代: 外来看護業務の現状分析, 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要, 23, 71-73, 1997.
 - 21) 菅田勝也, 高橋美智, 藤枝知子: 外来看護の業務分析, 看護管理, 2 (3), 179-185, 1992.
 - 22) 森垣由美, 清水あや, 志村留美子ほか: 救急外来看護スタッフの適正配置に関する検討, 日本救急医学会関東地方会雑誌, 14 (2), 840-841, 1993.
 - 23) 木下由美子: 外来看護業務分析から看護要員の配置を考える, 看護管理, 3 (7), 487-493, 1993.
 - 24) 小池順子, 数間恵子, 川村佐和子ほか: 老人の在宅ケアにおける看護技術研究 在宅療養支援における病院看護の役割に関する研究 (2) 外来看護における「在宅療養指導料」活用に関する実態と課題, 看護管理, 7 (9), 690-698, 1997.
 - 25) 野村京子, 阿部邦子, 黒沼美恵子ほか: 外来看護の役割拡大の方向性の検討 外来の看護業務に対する医師の意識調査より, 日本看護学会論文集26回看護管理号, 9-11, 1995.
 - 26) 坂田裕美, 平野貢三子, 辻裕子ほか: 救急外来における看護婦のコミュニケーション技術の改善 非言語的表現に対する患者の意識調査より, 日本看護学会論文集30回看護総合号, 15-17, 1999.
 - 27) 福島博子, 白井知子, 平田美智子ほか: 外来看護婦に求められる役割 「看護婦さん ちょっと…」から広がる信頼関係, 日本精神科看護学会誌, 40 (1), 489-491, 1997.
 - 28) 上野範子, 藤田峰子, 浅野弘明: 外来患者の実態調査 (第2報) 「京都府立医科大学附属病院」外来看護に視点を当てて, 看護展望, 17 (8), 942-950, 1992.
 - 29) 花房妙子: 患児・家族との信頼関係の確立とフォローアップ 看護婦の立場から, 小児看護, 18 (1), 43-48, 1995.
 - 30) 越野まゆみ, 近藤道江, 大野千咲ほか: 高齢外来患者のアンケート調査より考える外来看護婦の役割, 日本看護学会論文集24回老人看護号, 164-166, 1993.
 - 31) 岩佐悦子, 大井淑美, 作間由子ほか: 当院における理学診療科 外来看護の問題点 アンケート調査による検討, 臨床看護, 19 (9), 1413-1416, 1993.
 - 32) 上西洋子, 岩井隆子: 大学医学部附属病院における受診相談の分析 成人期と老年期患者の比較検討を通して, 大阪市立大学看護短期大学部紀要, 2, 15-19, 2000.
 - 33) 大田彩, 須藤章子, 糸嶺絵理子ほか: 精神科外来における相談受診者の実態 相談受診者への看護介入の試み, 精神看護, 1 (6), 34-37, 1998.
 - 34) 浦川加代子, 奥成子, 小島照子ほか: 在宅神経難病患者を介護する家族の介護負担感 (The Burden Of The Family Caregiving The Outpatients With Neuro-degenerative Disease) (英語), 三重看護学誌, 3 (1), 29-32, 2000.
 - 35) 森文子, 久米和興: 痴呆患者介護者の介護負担と外来看護に求められる機能, 日本看護研究学会雑誌, 22 (1), 27-37, 1999.
 - 36) 金玉礼, 稲垣絹代: 野宿生活者の集団赤痢発生に関連する地域看護の現状と課題 病院内の外来看護の機能と役割, 日本看護学会論文集30回地域看護号, 137-139, 2000.
 - 37) 近藤貴代: 尿路ストーマ皮膚障害の症例から定期的フォローを考える, 東海ストーマリハビリテーション研究会誌, 21 (1), 25-29, 2001.
 - 38) 幡谷ゆり子, 渡辺範子, 中井勝彦他: 当院におけるストーマ外来の現状, 東海ストーマリハビリテーション研究会誌, 21 (1), 86-92, 2001.
 - 39) 大澤千津美, 山岡裕美, 松井美枝子ほか: 尿路ストーマ造設患者の退院後のフォローに関する検討, Urological Nursing, 6 (8), 761-765, 2001.
 - 40) 桑原貴美子, 小池摩樹, 宇津野静子ほか: 内科受診中の糖尿病患者の眼に関する意識調査 外来看護婦としてのかかわり, 眼科ケア, 3 (11), 1089-1094, 2001.
 - 41) 中村伸枝, 出野慶子, 徳田友ほか: 1型の小児糖尿病患者の肥満度とその関連要因及び体重のとらえ方, 千葉看護学会会誌, 7 (1), 1-6, 2001.

- 42) 新實夕香理, 小池麻紀, 青木萩子ほか: 外来糖尿病患者の食生活の実態とその背景, 聖隷クリストファー看護大学紀要, 9, 135-140, 2001.
- 43) 古川直美, 谷本真理子, 工藤真奈美ほか: 心疾患患者の療養行動決定の構造, 日本看護学会論文集30回成人看護Ⅱ号, 155-157, 1999.
- 44) 菅原美智子, 黒沢ツヤ子, 鍋谷厚子ほか: 外来における心筋梗塞患者の継続看護を考える アンケート調査から, 看護の研究, 29, 228-230, 1997.
- 45) 正木陽子, 澤田道子, 中村久美子: 眼科外来通院患者のQOLの実態 視力障害との関連をみる, 看護技術, 44 (13), 1469-1473, 1998.
- 46) 伊藤久美子, 良村貞子: 体外受精治療中の患者の考えと外来看護に関する一考察, 看護総合科学研究会誌, 1 (1), 18-26, 1998.
- 47) 一宮茂子: 生体部分肝移植関係者の意識調査(第2報) 移植後の両親の不安と外来看護婦への期待, 日本看護学会論文集26回看護管理号, 126-129, 1995.
- 48) 坂本澄子, 高見陽子, 大橋千晶ほか: 下垂体性小人症患児の外来看護 在宅注射を継続していくための援助, 小児看護, 18 (10), 1395-1401, 1995.
- 49) 三笠照美, 川本かよ子: インターフェロン療法をしている患者への外来看護の対応, 看護実践の科学, 20 (2), 76-79, 1995.
- 50) 多並真起, 佐々木洋子, 松浦育ほか: 救急外来における看護婦のストレスの現状 バーンアウトスケールを使用して, 日本看護学会論文集30回看護管理号, 84-86, 2000.
- 51) 浦出節子, 前田セイ子, 若林久実ほか: 外来看護婦のストレスの実態把握及びストレス要因, 日本看護学会論文集27回看護管理号, 156-158, 1996.
- 52) 青木光江, 大崎文子, 上村かつ子ほか: 外来ナースよ目を醒ませ! 私たちが望む外来看護 外来看護の実態調査から, 看護学雑誌, 56 (9), 793-798, 1992.
- 53) 酒井禎子, 小松浩子, 林直子ほか: 外来・短期入院を中心としたがん医療の現状と課題 外来・短期入院を中心としたがん医療に携わる看護婦の困難と対処, 日本がん看護学会誌, 15 (2), 75-81, 2001.
- 54) 草地潤子: 外来看護婦の発する言葉についての研究, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 11, 82-88, 1998.
- 55) 大久保恭江, 小林美佐子, 小田切真弓: 股関節患者会発足に関わる外来看護婦の役割, 日本看護学会論文集25回地域看護号, 195-197, 1994.
- 56) 木下由美子: 外来看護評価基準による外来看護婦の自己評価, 看護管理, 5 (1), 10-15, 1995.
- 57) 吉村繁子, 木村裕美子, 中田よ支子ほか: 外来看護の業務改善に伴う看護婦の意識と業務内容の変化, 日本看護学会論文集24回看護管理号, 64-66, 1993.
- 58) 野並葉子, 山川真理子, 飯岡由紀子ほか: 外来における糖尿病患者の看護の実態調査, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 5 (1), 14-23, 2001.
- 59) 山川真理子, 野並葉子, 飯岡由紀子ほか: 外来における糖尿病患者の看護に影響を与える要因の検討, 兵庫県立看護大学紀要, 8, 101-113, 2001.
- 60) 有藤由理, 正木治恵, 野口美和子: 糖尿病外来における看護婦の活動の実態, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 1 (2), 84-95, 1997.
- 61) 正木治恵: 慢性病患者の看護援助の構造化の試み 糖尿病専門外来看護の臨床経験を通して(その2), 看護研究, 27 (1), 49-74, 1994.
- 62) 正木治恵: 慢性病患者の看護援助の構造化の試み 糖尿病専門外来看護の臨床経験を通して(その3), 看護研究, 27 (4), 335-348, 1994.
- 63) 正木治恵: 慢性病患者の看護援助の構造化の試み 糖尿病専門外来看護の臨床経験を通して(その1), 看護研究, 26 (7), 621-648, 1993.
- 64) 佐藤厚子: 栄養バランス表図示を用いた高齢糖尿病患者への食事指導 外来通院事例の問題点, 秋田桂城短期大学紀要, 12, 1-7, 2002.

- 65) 中野裕子, 原和子, 下村裕子: 外来におけるインスリン療法の導入方法と看護婦のかかわり 61事例のインスリン療法導入患者の分析より, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 5 (1), 24-34, 2001.
- 66) 瀬戸奈津子, 正木治恵, 野口美和子: 糖尿病外来における電子メールを使った看護相談システムに関する研究 電子メールを使った看護相談システムの試行と評価, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 4 (2), 83-93, 2000.
- 67) 桜田俊子, 幸田恵智子, 工藤八寿子ほか: 糖尿病外来通院中断患者へ電話を試みて 中断防止対策を考える, ナーシング, 21 (9), 126-129, 2001.
- 68) 濱本順子, 近藤美津子: 精神科外来における個別看護を考える, 日本精神科看護学会誌, 42 (1), 126-128, 1999.
- 69) 小松万喜子, 立澤とくゑ: 精神科外来における看護面接の実際 主治医と面接できない精神分裂病患者への援助を通して, 精神看護, 3 (4), 36-40, 2000.
- 70) 市河正文: 精神科外来における注意サイン・服薬自己評価用紙の活用結果, Nurse eye, 15 (1), 39-43, 2002.
- 71) 森川百合子, 丸岡美江, 玉井弓子: 不登校児が勤労学生として自立するまでの心理過程 外来看護でできる勇気づけの効果, 日本看護学会論文集24回小児看護号, 246-248, 1993.
- 72) 古谷佳由理: 外来における小児がん患者への病名告知に対する看護援助, 千葉看護学会会誌, 5 (2), 55-60, 1999.
- 73) 猿渡かおり, 岸田美春, 清田純子ほか: 継続看護が困難な母親に対する家族システム理論を用いての外来看護婦の関わり, 日本看護学会論文集30回小児看護号, 24-26, 2000.
- 74) 山原和恵, 工藤幸恵, 坪井敬子ほか: 小児科外来における家族との看護過程共有の効果, 日本看護学会論文集30回小児看護号, 27-29, 2000.
- 75) 古山幸子, 金澤薫, 竹山富美子: 在宅中心静脈栄養施行患児の自立へ向けての援助 患児・母親へのかかわりを通して, 小児看護, 21 (10), 1308-1315, 1998.
- 76) 田中克子, 上原優子, 新平鎮博ほか: 外来看護から慢性疾患児にかかわった養護教諭へのアプローチ, 大阪府立看護大学紀要, 1 (1), 51-57, 1995.
- 77) 成清優子, 福重哲志: 外来看護婦としてのターミナルケアの経験, ホスピスケアと在宅ケア, 4 (3), 243-246, 1996.
- 78) 成清優子, 小川節子: 心理変化をともなった癌性疼痛患者への外来看護婦のかかわり, 久留米大学医学部附属看護専門学校研究紀要, 13, 48-51, 1994.
- 79) 平田直子, 音山由美子: KOMIチャートの臨床的展開 外来看護にKOMIチャートを取り入れて 術後癌末期患者の事例報告, 総合看護, 33 (2), 79-85, 1998.
- 80) 佐藤珠美, 竹ノ上ケイ子: 夫との性的関係に失調をきたした外来妊婦の援助, 助産婦雑誌, 52 (11), 1001-1007, 1998.
- 81) 伊藤夏代, 小寺佐由美, 浅野直子ほか: 脊髄損傷合併妊婦の外来での看護 地域と施設が一緒に支援して成果を得る, 助産婦雑誌, 54 (2), 163-167, 2000.
- 82) 清水佳世, 高橋芳子, 糸賀三恵子: 当院における母乳外来の現状と評価 8ヵ月間の母外来台帳を分析して, 茨城県母性衛生学会誌, 20, 60-62, 2000.
- 83) 深沢紀代美, 渥美一恵, 伏見公子ほか: 育児相談を通しての外来看護婦の役割を考える 1ヵ月検診に訪れた母親を対象に個別指導を行って, 日本看護学会論文集24回母性看護号, 118-120, 1993.
- 84) 市原真穂, 浜詰幸子, 佐藤和子ほか: リハビリテーション専門病院における外来看護相談活動の分析 4年間の変化から, 日本リハビリテーション看護学会集録, 11, 39-41, 1999.
- 85) 熊田悦子, 桐生有美子, 清永純子ほか: J大学病院外来における看護行為の分類と外来看護の課題, 日本看護学会論文集30回看護管理号, 6-8, 2000.
- 86) 加藤裕子, 四方見子, 佐藤美香ほか: 患者背景に即したストーマケア セルフケア変更困難な高齢患者の1例, STOMA, 10 (1), 19-20, 2001.
- 87) 真野あけみ, 宍倉政美, 丸山多恵子ほか: 外来における看護過程の展開を試みて ロイ理論を用いての再考, 臨床看護, 27 (4), 570-580, 2001.
- 88) 甲斐沢政美, 太田君枝, 橋倉泰彦ほか: 術後8年9ヵ月を経過した生体部分肝移植女兒の術後外来管理, 看護技術,

- 45 (8), 103-110, 1999.
- 89) 小川敦子, 佐々木千鶴子, 小島朋子ほか: 神経難病患者に対する間欠導尿の継続指導, 臨床看護, 22 (9), 1402-1405, 1996.
- 90) 小林美奈子, 坂本幸子: 外来看護婦による尿失禁・頻尿患者のセルフケアの援助, 看護技術, 38 (14), 1506-1511, 1992.
- 91) 船坂ゆき子, 森平潤子, 瀬木洋子ほか: 外来看護婦の援助 処置室における意識的な声かけの試み, 日本精神科看護学会誌, 42 (1), 129-131, 1999.
- 92) 野川道子, 川村聡子, 網島和子ほか: 外来看護婦の役割拡大の検討 身体的症状の背後に生活適応障害をもつ患者の援助を通して, 日本看護学会論文集23回成人看護Ⅱ号, 181-184, 1992.